



JAPAN URBAN DESIGN
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都渋谷区広尾1-10-4
越山LKビル内150

TELEPHONE 03-5420-5995
FACSIMILE 03-5420-5996

JUDI NEWS

010 March 20.
1993

発行者
都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●論説／トランクションナルなデザイン方法	1
●特集／市民まちづくりにおける都市環境デザイン	
1. 玉川まちづくりハウスの活動実践から	2
2. 芦屋市における市民ぐるみの景観形成活動	3
3. 徳島における都市環境デザインの啓蒙	4
4. 神戸・いきいき下町推進協議会とまちづくり	5
●ブロック例会レポート	
関西ブロック・都市環境デザインセミナー報告	6
関東4ブロック第2回合同例会報告	7
●お知らせ	
代表幹事会より	8
事務局より	8
編集後記・特集の企画意図	8

市民と響き合う創造的で 豊かな都市環境デザインへ

論説

トランクションナルなデザイン の方法

林 泰義

HAYASHI, YASUYOSHI
広報・出版委員



トランク・シティ（ニューヨーク市）・プロジェクトは、近年のもっとも興味深い物語を生み出した。このプロジェクトについては、関東の例会で柳田さんが報告され、いずれ、このニュースにも掲載されると思われる所以、その内容については省略することとしよう。

注目すべき点は、高さ 550メートルの世界一の超高層ビルを含む大規模再開発への、市民と、建築家、そしてマス・メディアの対応である。

開発反対の市民グループは、運動資金として巨額の寄付を募り、この資金で、一級のプロ建築家、都市デザイナー等に、カウンタープランの策定を依頼する。

一方、アメリカ建築家協会は、自主的活動として、トランク・シティ・プロジェクトの評価作業を行い、地下鉄駅の交通容量等の問題点の指摘を含む報告を公表する。また、この評価作業に従事した建築家のうちの有志が、自主的な対抗案を作成して発表する。

ニューヨーク・タイムズ紙は、このプロセスをフォローし続け、適時、報道して市民の判断に必要な情報を提供しつづけたのである。

結果として、1991年に、トランクは、市民側の対抗案を全面的に受入れて市民案作成に携わった専門家チームを自らのスタッフに雇い入れるのである。

ニューヨーク市民は、この市民案によってトランクの時代錯誤的な世界一のノップビルを獲得するかわりに、河との自由なアクセスの復活、広々とした河沿いの公園、マンハッタンの文脈に調和した建築群、そして、新しい就業の場、アフォーダブル住宅を含む居住の場、そして税収増を獲得したのである。

サンフランシスコのミッションベイ再開発においては、市民の参画するプロセスによって、当初のI.M.ペイの超高層を含む案から、ゆたかな公園

やアフォーダブルな住宅を多く配した案へと、その内容が、市民に望ましいものへと発展している。都市は、市民、企業、行政によって創られるが、これらの例にみるとおり市民の果たす役割がきわめて高いことが判るであろう。

こうした事例と照らしてみると、市民に対して全く閉じられた日本の都市開発プロセスは、都市デザインの質を高める機会を自ら放棄していると言ってよい。

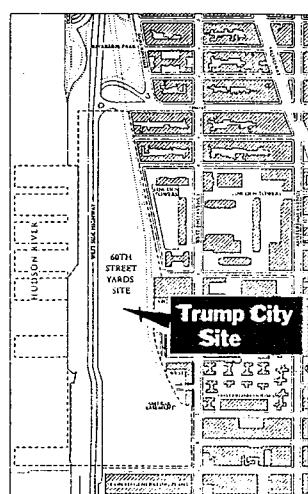
バブル時代に雨後のたけのこのように生まれ出た大規模再開発プロジェクトのデザインは、驚くほど自然条件や周辺環境からかけ離れ、非連続的であり、アーティキュレーションに欠け、その素材は人間の健康や心理を無視している。

それは、市民の参画をおろそかにすることによって、デザイン・プロセスに必要な、多様で、多角的な情報や知恵を充分に集約する方法や技術の開発を怠ってきた結果でもある。

自然環境、都市の文脈、そして都市コミュニティとの相互作用の中でデザインを練り上げていく、トランクションナル・デザイン、あるいはトランクションナルなアプローチと呼ばれるデザインの方法論が、日本では省みられない点に、根本的な問題のひとつがある。

一方、市民の側も、開発側のオープンな姿勢を導き出すほどの、高い水準のカウンタープランを可能にする新しい創造的な運動論を習得する必要があるであろう。

われわれが、単に都市デザインと言わず、「環境」という言葉を加える理由はどこにあるか。トランクションナルなアプローチによって、自然的、物理的環境のみならず、社会的環境をも組込んだ新しいデザインの方法論を社会に問うことが、都市「環境」デザインという言葉にこめられているのではなかろうか。



玉川まちづくり ハウスの活動実 践から

—都市環境デザイン
のコストパフォー
マンス—

伊藤 雅春

ITO, MASAHIRO

玉川まちづくりハウス



具体的な話から始めましょう。昨年の6月に近所で空地になっていた区所有地を借り受けワイルドフラワーの種を蒔き、地域の人達で自主管理するお花畠を作る活動を始めました。名付けて「玉川コミュニティガーデン」。水道は隣の敷地の人から引かせてもらい、水道料金は町会が負担してくれることになり、種は世田谷区の「水と緑の課」を通して第一園芸にオリジナルブレンドしてもらいました。花は8月には咲き始め、秋には誰もの予想をこえて美しく咲き乱れ、ほとんどお金を掛ける事なく空地がとてもエキサイティングな地域の空間として再生しました。【写真-1】



時を同じくして近くの空地を区が手にいれ小学校の学校菜園として整備することが決まり、多額のお金を受け整備することが近所で噂になりました。コミュニティガーデン活動をしている人達の間でもどんな素晴らしいお花畠ができることだろうと期待が膨らんでいました。

今年になってようやく工事が始まったのはよいのですが、日々できあがっていく学校菜園を見ていると何とも悲しくなってしまうのでした。まずは全ての豊かな表土を取り去り、まるで棺桶でも並べたような8つの煉瓦で囲まれた四角い花壇が作られ、動物園の檻のように高い目障りなフェンスが周囲に巡らされました。最後にだめ押しのように残った地面の全てには、インターロッキングブロックが敷き詰められたのです。【写真-2】



これは有り余った予算を消化するためとしか思えないようなできごとです。道行く近所の人達は、言葉を失い工事をしている職人さんに「きれいになりましたね・・・」と挨拶をするしかありません。この言葉は決して感動に結び付いてはいないのです。コミュニティガーデンには、ぜひ作業と一緒にしたいと何人の人が声を掛けてくれました。ここには決定的な質の違いがあることは明らか

かです。

もう少し、環境作りのコストパフォーマンスについて考えてみることが必要ではないでしょうか。素人の行う活動には美しい環境デザインの視点が欠けているのではなくて、問題はすべての人や仕組みの中に忍び込む官僚主義が美しさへの接近を理不尽に阻んでいることではないでしょうか。緑道の緑をすべてはぎ取り、ひたすら石を貼り回すこと、高速道路の下にお金を掛け公園を整備することも本質的に何かがおかしいと思います。環境デザインのコストパフォーマンスをもっと素直な気持ちで市民の立場から見直すことが必要です。人々の喜びを生み出すためのコストをもっとシビアに計り直すことが必要だと思います。

こんなこともありました。ある小さな公園の計画に際して区が近隣住民に対して説明会を実施するという話があり、玉川まちづくりハウスではワークショップ形式の説明会を提案しました。担当者の提案を基に参加者みんなで模型を作るワークショップを計画したのです。当初変更はしないと言っていた担当者ができあがっていく模型を見て説明会の後すぐに変更案を考え始めたのには、こちらが驚きました。

こうした事例を経験しながら玉川まちづくりハウスでは、身近な公共施設の整備や計画に当たって「デザインゲーム」というワークショップの手法を積極的に取り入れ展開していくこうとしています。

【写真-3】



「デザインゲーム」では、専門家の行うデザイン決定プロセスをできるだけオープンにし、市民参加によりデザインを豊かにしていくことを目指しています。もちろん専門家はこの「デザインゲーム」のプロセスの中で市民と実質的なキャッチボールを行いながら自信を持って仕事に取り組んでいくことが可能になります。

市民主体のまちづくりにおける「都市環境デザイン」の視点として今必要なのは、美しさもさることながら喜びの共有化あるいは協同による喜びの創造ではないでしょうか。そしてそこに投じられたお金のコストパフォーマンスの再確認ではないでしょうか。私たちの望んでいるのは材料の高価さやきれいさではなく、プロセスと状況全体の美しさなのです。その喜びの価値について語ることができるところにこそ市民主体のまちづくり活動の大きな特色があると思います。

芦屋市における市民ぐるみの景観形成活動

久 隆浩

HISA, TAKAHIRO

大阪大学

JUDI会員/関西ブロック



1 芦屋市都市景観研究会の活動

芦屋市は、人口約9万人、面積約17km²の小都市である。六麓荘という日本有数の高級住宅地を抱えていることからもわかるように、市民の所得水準は全体的に高く、また、知識水準も高いところである。

芦屋市では、都市景観形成計画の策定にむけて1990年より都市景観研究会を組織し、市民ぐるみの調査や計画策定作業をおこなってきた。研究会は市が主催する組織であるが、そのメンバーは行政だけでなく、市民や専門家を含めたものとなっている。市民といってもかなりデザインの専門色が強いメンバーであり、具体的には、建築家の福島忠嗣氏、色彩デザイナーの樽本正弘氏、造形作家の河崎晃一氏、映像作家の山本徹男氏の4名である。これに、市外から、都市計画家の小林郁雄氏と私が参画している。

こうした研究会を演出したのは小林氏であり、福島氏が小林氏と大学時代の先輩・後輩の間柄であったことから、芦屋市在住の福島氏をキーパーソンとして、市民を巻き込んだ景観形成の動きをスタートさせたわけである。

研究会は原則として月1回開催され、景観形成計画策定に向けて話し合いがもたれている。また、席上では、適宜、重要な公共事業についてデザインの報告がなされ、景観的側面からの討論がおこなわれている。さきほど述べたようにこの研究会は、かなり専門性が高い市民集団であるため、議論の内容も相当高度なレベルでおこなわれる。とくに樽本氏は環境色彩にも造詣が深く、公共施設やサイン計画などの色彩面に適切な助言をおこなっている。また、市民啓発ビデオの制作は、映像作家である山本氏が担当している。

2 芦屋の景観を考える会の活動

一方、市民レベルで活動する組織としては、さきほどの福島氏が主宰する「芦屋の景観を考える会」がある。芦屋は大正から昭和にかけて大阪の豪商たちの別荘地として発展してきた場所だけに、F. L. ライト設計の山邑邸をはじめ、たくさんの洋館が現在でも残っている。福島氏はもともと「芦屋洋館建築研究会」を主宰していたが、景観を考える会はこれが発展したものであり、都市景観研究会のメンバーが世話人として参加している。

景観を考える会の主な活動には、月1回定例でおこなわれている「アシヤ景観シンポジウム」がある。初期は、さきほどの都市景観研究会のメンバーが中心になって講演をおこなっていたが、回を重ねるごとに、さまざまな市民の方に講演をお願いしている。その内容は、さすが知識水準の高い芦屋にふさわしく、しっかりとしたものが多い。また、まちに出て景観を考えるために、数カ月に1度、景観ウォッチングを企画している。

こうした景観を考える会の活動を広報面から支援しているのが、地域コミュニティー紙の「アシヤ・アドプレス」である。シンポジウムの告知か

ら内容報告まで紙上を通じて市民に知らされる。このような活動を展開する中で、市民全体の景観に対する認識が高まっていくのが肌で感じられる。

こうした機運を受けて、昨年12月には「景観市民展」と銘打って、市民から景観にまつわる写真や絵画を募集し展示会をおこなったり、また、青年会議所や「芦屋川に魚を増やそう会」といった景観に関わる諸団体や一般市民をまきこんで「景観市民会議」を開催し、さらにネットワーク拡充を図っている。

3 芦屋市における展望と課題

芦屋市においては、このように市民ぐるみの景観形成活動がおこなわれつつあるが、こうした活動の展開にはいくつかの好条件が重なっている。

そのひとつは、人口約9万人、面積約17km²という芦屋市のスケールのコンパクトさである。市民どおし、さらには、市民と行政の距離が近いため人的ネットワークがつくりやすく、また、まちのすみずみまで目が行き届きやすいので、市民が一丸となった景観形成に取り組みやすい。また、二つめには、市民の所得水準や知識水準の高さが挙げられる。金銭的にある程度ゆとりがあるということは、デザイン面にも好都合であり、また、活動の水準を保っていくためには、知識水準の高さが有利に働いている。さらに、芦屋市都市景観研究会や芦屋の景観を考える会といった組織がきちんと運営されていることが、市民主体の景観づくりの活動を確固としたものにしている。

最後に、こうした積極的な景観形成活動が具体的な都市環境デザインとなって結実するための今後の課題を述べて稿を締めくくることとする。

以上、述べてきたことはいいことづくめのように聞こえるが、実は、もっとも大きな課題が残されている。それは、活動や議論は盛んにおこなわれているが、それがかたちとして具体的なデザインまでたどりついていないという点である。こうしたハードルを乗り越えるためには、いくつかの試みが有効ではないかと思われる。ひとつは、都市景観研究会に集まっているメンバーのデザイン能力をいくつかの公共事業のなかで活用していく方策である。また、シンポジウムの発展形態としてワークショップ的な試みをおこない、具体的なデザイン提案をおこなっていくことも考えられる。このような試みとして世田谷区をはじめ先進的な取り組みがみられるが、それらを参考にしながら芦屋にふさわしい形態を模索する必要があろう。

さきほど、市民の知識水準が高いことは好都合であると述べたが、知識水準の高さとデザイン作業の実践とは必ずしも比例するものではない、と私は考える。つまり、知識は単なる議論の道具だけで終わってしまう危惧もあるわけである。市民意識の高まりを受けて、今後、実際のモノとしてどのようなものができるのか、これにはもう少し情勢を見つめ、いくつかの新たな方策を積み重ねていく必要がある。



徳島における都市環境デザインの啓蒙

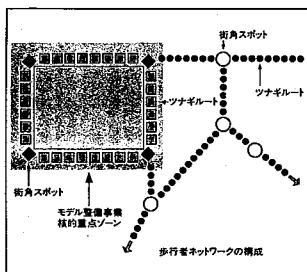
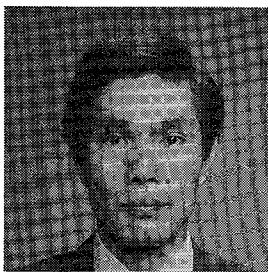
「ひと 住まい まち」

林 茂樹

HAYASHI, SHIGEKI

林 建築事務所

JUDI会員/四国ブロック



プロローグ

何の前触れもなくファクシミリで送られてきた原稿依頼は締切まで9日しかなく。とりたてて書くネタと余分な時間も無いくせに、編集者の苦労を思えば断わるだけの勇気も持ち合わせず。またまた稚拙な文章を書く羽目になった優柔不断な性格を恨みつつ、ワープロに向かったのが締切前日。

とりあえず徳島県建築士会の「アーバンデザイン研究会」の市民と共に考えるまちづくりを基本姿勢とした活動の報告させて頂きます。

まちづくり計画に対する人々（関係者）の認識

徳島市では、「うるおいのある街づくり地区整備モデル事業」が8年ほど前計画策定され、現在は計画実施も最終段階にさしかかっております。

この計画は、うるおい、やすらぎ、ゆとりなど精神的、文化的な豊かさを配慮した総合的な居住環境の質の向上をめざした「うるおいのある街づくり」の空間形成事業関わる部分を、地域に根ざしたかたちで具体化する事業です。地区整備のために「安全な歩行空間の創造」「子供の遊び場の創造」「ふれあいのある辻空間の再生」「身近な景観の創造」といった4つの創造テーマを生かした「街角スポット」、それらを結ぶ「ツナギルート」を実現して歩行空間のネットワークづくりを図るもので、具体的には核的重點ゾーンとして地域の人々との関わりの大きい小学校3校をモデルとして整備しているものです。

一番最初に計画が実施された福島小学校では研究会で実施設計まで行いました。

この計画では、安全な歩行空間（通学路）の確保や開放された前庭などがテーマとなり、既存のブロック塀を取り払い、生け垣や木のシンボルゲートを設け、狭い全面道路の為に歩道を造るなど地域の特色を持たせた修景計画を行ってきました。

実施設計に当たっては実際の通学時の問題点を探るため、PTA、先生と我々スタッフ一緒に早晨の視察を行うなど、意見交換会、説明会を数回開催し、共に考えてゆきましたが、このなかで一番ネックになったのがやはり学校側の対応でした。模型を提示しての説明会で、何も言わないで納得したかの様に見えて、後に学校側から「管理上開放することは出来ない」との電話が入るなど先生の説得に苦労しました。また、どの学校でも目に付くのが前庭を占拠する先生方の自動車です。

続いて行った県の「まちなみ修景モデル事業」における公共施設の調査においても一番の問題が敷地にあふれる職員の車でした。モデル5施設のうち盲学校の実施設計を私が担当しましたが、通学路は狭いえ前庭だけでなく運動場まで車があふれ、登下校時には人と車が交錯し、特に安全性が問題でした。学校と県関係各課からなる研究会で討議を重ねましたが、職員の福利厚生も大事だという校長の意向が動かせず基本計画案の前庭修景を拒否されてしまい、隣接のライトホーム前庭修景する結果となってしまいました。視力障害者のための施設といういちばん大切な主役を忘れ自

分達の駐車スペースを確保した教員の意識をこれからどのようにすれば変化させることができるのでしょうか。

ひと 住まい まち 展

県ではこの修景モデル事業の集大成としてまちなみ修景の手引き「公共施設外部空間デザインマニュアル」を作製した。自治体が都市景観の向上を図るために自らの公共施設のデザイン改善に努めなければならないとの考え方からあります。

これは中間領域である外部空間のためのものであったが、徳島市では建物のデザインまで踏み込んだ「都市環境デザインマニュアル」を作製、地域の景観を公共施設がリードしようとする試みであります。

これら両マニュアルの編集を徳島アーバンデザイン研究会で行ったこともあり、県の文化の森総合公園（美術館・博物館・図書館・文書館などを一体化した施設）21世紀館で、一般の住民に対してもっと街並に対して目を向けさせようとする企画展の開催が計画され、その企画製作の委託を徳島県建築士会が受けたのは一昨年の秋でした。

それ以来研究会では検討を重ね、タイトルは「ひと 住まい まち」、テーマを「あなたの家からのまちづくり」として、徳島らしい「潤いのある」まちなみづくりが広く浸透することを目指し、次の3つの展示の目的を掲げ、製作に取組みました。

1. 学ぶ（どんなルールがあるんだろう）
2. 計画する（どんなまちにかわるんだろう）
3. 行動する（まちづくりに参加してみよう）

スペースの関係で見学者の対象をこれから家づくり等を通してまちなみ形成に大きな役割を果たす3~40歳台の一般住民に絞り込み、子供と一緒にファミリーで見に来る事を想定。徳島の現在のまちなみの問題点や、まちなみづくりにはきまりがある事を知っていただき、ルールに従って設計されたまちなみ模型やCGによる修景モデルでの効果を体感してもらおうというものです。

このような一般の人を対象にしたまちなみ展は全国でも始めてではないかと思います。

エピローグ

人はなんて身勝手なんだろう。頭でわかっていても、事自分に直接関係すると不便を図おうとはしない。しかしそれが身障者施設であって、それに携わる人間が理解を示さないのでつらい。

私の事務所は盲学校の近くにあり、この前を通るたびに私の非力をを感じ心が痛みます。

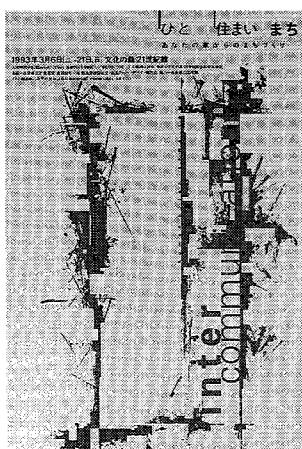
こんな景観以前の基本的な問題で足踏みしているので、なかなか景観論争まで話が乗らない状況があり、どれだけの人が「ひと 住まい まち」展を見て感じていただけるか期待と不安がある。

この号が出る頃には企画展も終わっているかもしれないが、もし間に合うようであればお近くの方はぜひご一覧のうえご意見を下さい。

場所は文化の森総合公園（徳島市八万町向寺山）

1993年3月6日から21日まで開催

（月曜休館）入場無料です。



神戸・いきいき 下町推進協議会 とまちづくり

三輪 康一

MIWA, KOUICHI

神戸大学



1 協議会の発足とこれまでの活動

大都市のインナーエリアには人口減少や高齢化、住環境などの問題を抱え活力が低下している〈下町〉が少なくない。この下町のいくつかでは地区の再生をめざすまちづくりが進められているが、その主体は住民であり、行政がそれを支援するのが一般的な構図である。ところが、住宅の建替えなど建設活動に直接携わる設計事務所や工務店などはその影響の大きさにもかかわらず、これまでまちづくり活動にほとんど関与してこなかった。

1992年7月神戸で「いきいき下町推進協議会」（会長：安田丑作神戸大学助教授）が発足した。この協議会は、こうした〈下町〉における住民と行政のまちづくりを支援するための第3の組織として、建築関係団体と地元住民、行政、専門家が集まって設立されたものである。

協議会の活動はいまだ起步段階にあるが、当面はまちづくり情報誌「いきいき神戸 下町新聞」を発行するとともに、モデルケースとして神戸の下町の一つである味泥地区のまちづくりへの支援を通じて、協議会の活動方向を模索している。こうした手探りの活動の一つとして、1992年11月末より「パネル展+トークイン」を味泥の自治会館で開催した。パネル展では下町住宅の建替事例と地元をはじめとする各地のまちづくり事例が紹介され、あわせて住宅改善相談会も実施された。またトークインには、市内各地でまちづくりに取組む人々が多数参加し、その多彩な活動が紹介された。このトークインは、まちづくり運動の横の繋がりをつくるきっかけになろうとしている。

2 建築からのまちづくり

この協議会の特色の一つは建築関係者のまちづくりへの参加という点にある。建築に携わる者は、通常、単体の建築物の計画、設計、建設を通してまちに関わりをもつが、さらにまちづくりに繋がる可能性をもちながらも、建築単体の枠内では乗り越えられない部分があり、もどかしさを覚えること多くあった。協議会では、コミュニティアーキテクトやコミュニティビルダーを育成し、地域にある種の〈きずな〉をもったいなみづくりの実現を目指している。それを含めて、たとえば建築デザインの延長として環境デザインを展開していくとか、事業採算面から住宅建替え可能性を追及するとか、住生活の視点から台所の流し台の改善から手をつけていくといった、さまざまな

関わり方が議論されている。いずれにせよ、個々の等身大のスケールから発想する〈建築からのまちづくり〉を原則にしているといえよう。

協議会の二つの特色は、各地域のまちづくりの主体となる住民間のネットワークづくりにある。神戸市では、インナーエリアのなかでも、真野地区をはじめ、東川崎、浜山、新開地、岡本、新在家など各地でさまざまなまちづくり活動が進められている。しかしそれが一体、どこでどういうことをやっているのか、どんな悩みがあり、どのように解決しようとしているか、といった情報交流は同じ市内にありながらも意外なほど少ない。先述のトークインはまさにそうした情報交流の場でもあったが、今後はさらに「下町新聞」や各種のフォーラム（「下町サミット」の開催を構想している。）を通じて住民サイドでの情報交換の拠点としての役割を果たすことが大切だと思われる。

3 都市環境デザインとまちづくり

それにしても、まちづくりのさまざまな場面で造形デザインの役割はますます重要になっている。優れた環境デザインによってまちづくりが勢いづき、まちの活性化に繋がるということが共通の認識になりつつあるようだ。たとえば味泥地区では「デザインされた空間」を積極的に導入することでインナーエリアの負のイメージを払拭する「下町C.I.計画」を構想し展開している。まちづくりの結果としての環境デザインは、具体的に目で見える形で現れる。それゆえ、その善し悪しがまちづくりの成否に繋がるが、優れたデザインがまちづくりの目的であると同時に、住民の自負となり、さらなる活動の推進エネルギーともなるのである。

現在、協議会では下町住宅とまちなみ形成の将来像を提示する「いえなみ提案」を検討中である。ここでは従来のように、最初から全体に枠を始めたトップダウンの方法ではなく、個々の建築サイドからモデルケースとして住宅設計を先行し、そのなかから共通するいえなみ形成原理を引き出そうとしている。個から発想してまちなみにつなげていくかをねらいとしているからである。

かつて下町には本来の都市らしさともいべき集住の智慧とその器として公と私の空間、私と私の空間の柔らかい関係があり、それが魅力的な生活の場をつくってきた。今は失われたその魅力をどう引き出し、いかに再構築するかが〈建築からのまちづくり〉に課せられた大きなテーマである。

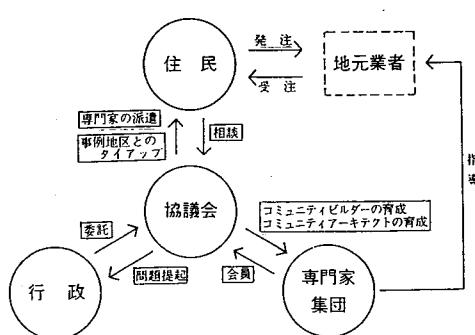
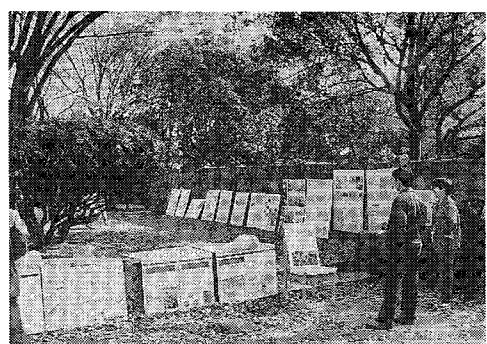


図 協議会の位置づけ



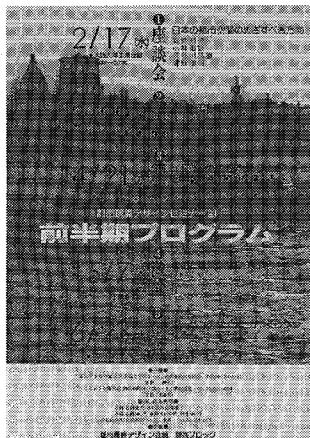
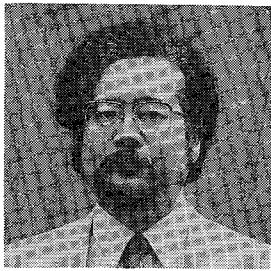
「いきいき下町パネル展」会場風景

関西ブロック・ 都市環境デザインセミナー報告

鳴海 邦穎

NARUMI, KUNIHIRO

代表幹事/関西ブロック



1. 1992年

1992年にはブロック1年目のシリーズ・セミナーとして、下記の9回のセミナーが行なわれた。

- ① ポストモダンの都市デザイン <2月3日>
講師：柘植 喜治（ジョン・ジャーティ・パートナーシップ）
司会：鳴海邦穎、コメンテーター：江川直樹

ホーテン・プラザの計画で知られるジョン・ジャーティ・パートナーシップの日本人スタッフ柘植さんに、この事務所のプロジェクトを事例にしながら、新しい都市デザインの考え方を論じてもらった。

- ② どんな公園が本当に必要なだろうか
<3月2日>

講師：大塚 守康（ヘッズ）
司会：加藤春樹、コメンテーター：宮前保子

近年、特に大都市中心地区における公園のあり方が問われているが、スライド・サーベイなどを通じて、アーバニティの高い公園の可能性について論じてもらった。

- ③ 都市のアーツスケープを考える <4月2日>
講師：今井祝雄（造形家）
司会：山崎正史、コメンテーター：長谷川弘直

都市空間におけるアートの役割が重視されつつあるが、その取り扱いには問題がないわけではない。作家であるとともにコーディネーターでもある今井さんに、その望ましいあり方について論じてもらった。

- ④ 都市開発におけるデザインの意味とコーディネーターの役割 <5月7日>
講師：角野幸博（武庫川女子大）
司会：榎原和彦、コメンテーター：辻井道弘

都市開発が大規模化するにつれて、プロジェクトのコーディネーターの役割が重要になってきている。しかし、意志決定過程において、リスク負担の決定をいかに行なうかなど、残された課題は多い。いくつかのプロジェクトの経験をふまえ、解決すべき課題について論じてもらった。

- ⑤ 景観形成をどう支援するか—CGによる試み— <6月1日>

講師：土橋正彦（アーツインスティテュート研究所）
司会：鳴海邦穎、コメンテーター：久 隆浩

景観設計のジャンルにおいて、CGの果たすべき役割に対する期待は増大しつつある。表現の精度、ハンドリングの容易さなどについて解説してもらうと同時に、新たな展開の方向について論じてもらった。

- ⑥ 都市環境デザインからみた再開発
<9月29日>

講師：北条蓮英（アーツインスティテュート研究所）
司会：鳴海邦穎、コメンテーター：田端修

再開発によってなかなかいいデザインの環境を生みだすことがむずかしいといわれる。果たしてそれはどういう理由によるのか。実際のプロジェクトを例にしながら、問題と解決の可能性について論じてもらった。

- ⑦ 集まって住む形をデザインする <10月26日>
報告：江川直樹（現代計画研究所）
司会：鳴海邦穎、コメンテーター：千葉桂司

画一的な住宅地が多い中で、近年、個性的な空間構成をもった住宅地が生まれつつある。伝統的な集落の豊かな空間に学びながら、いかにアーバニティの高い住宅地が形成できるかについて、論じてもらった。

- ⑧ ブラジルにおける都市づくり <11月24日>

講師：ウンベルト・ヤマキ
(アラカルト・リドリーナ州立大学准教授)
司会：田端修、コメンテーター：鳴海邦穎

壮大な遷都、ブラジリアで知られるブラジルでは、さまざまなタイプの新都市づくりが行なわれている。批判の対象になったブラジルが現在どのようにその人間化が進んでいるか、あるいは現在どのような新都市のデザイン上の課題があるかについて論じてもらった。

- ⑨ 香港九龍城にみる都市性 <12月19日>

講師：上野 泰（上野デザイン）
司会：鳴海邦穎、コメンテーター：吉田 薫

最近九龍城が閉鎖され再開発が進行することになっている。長く九龍城を見続けてきた上野さんに、九龍城の成り立ちやその構成を紹介してもらうとともに、九龍城から学ぶべき点について論じてもらった。

2. 1993年前半計画

昨年の経験をふまえ、本年は次のような5つの形態のセミナーを交互に実施していく。

セミナーの5つ形態

座談会：原則として会員数名によって、都市環境デザインに関する重要な課題について意見交換をする。

主弓長：会員が都市環境デザインに関する主張を講演する。

言論座：主として学生向けに都市環境デザインに関する基礎的な考え方を講義する。

激論：他組織との討論、あるいは具体的な事例を対象とした批評を行なう。

異分野交流：都市環境デザインに関心をもつ異分野の人材を招待し、講演ないし意見交換を行なう。

前半のプログラムは下記のとおりである。

- ① 2/17（水）

座談会 日本の都市空間のめざすべき方向
鳴海邦穎、小林郁雄、長谷川弘直、材野博司

- ② 3/29（月）

主弓長 アートで都市をつくる
折田知子

- ③ 4/21（水）

言論座 イタリアの都市デザインから日本の都市づくりを考える
井口勝文

- ④ 5/7（金）

激論 都市と建築あり方を考える
JUDI vs JIA
取りまとめ：材野博司、江川直樹

- ⑤ 6/23（水）

主弓長 アーツインスティテュートがつくろうとする
ムラ・マチ起こし
長谷川弘直

関西ブロック・セミナーに関する問い合わせは、下記あて、ファックスにてお願いします。

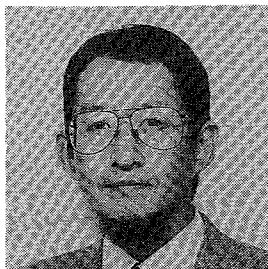
事務局 リット・ベッズ 永井 Fax:06-364-2605

関東4ブロック 第2回合同例会 報告

窪田 陽一

KUBOTA, YOICHI

代表幹事/関東ブロック



「Euro Disney Resort と Euro-scape」

<1992年11月12日午後7時から、東京・新橋にあるサロンYUで窪田陽一(埼玉大学工学部)による講演が行われた。概要は以下の通り>

ユーロディズニーリゾートは、フランス政府の肝煎りで1992年4月12日にオープンした欧洲初のディズニーランドを核とする内陸型のリゾートである。パリの中心部から東方約30kmにあるマルヌ・ラ・ヴァレ新都市開発地区の東端部に確保された円形の特別区域(1943ha)に、テーマパーク、6つのホテル、モール、ゴルフ場などが第1期分(600ha)として完成した。最終的には住宅やオフィスビルなども建設される計画で、フランス国鉄が誇る新幹線TGVの駅が中心にあり、間もなくシャルルドゴール空港やオルリー空港と直結される。パリとは高速地下鉄RERにより約45分で結ばれ、高速道路へのアクセスも至近にある。

テーマパークはフランスの国民的SF作家ジュール・ベルヌの『海底二万里』を題材にしたアトラクションが加えられている他は基本的に本国アメリカにあるものと同じである。ヨーロッパの城館をモチーフにしたピンクのディズニーランドホテルが入口にあるのは御愛敬で、特徴的なのはリゾートホテル群の建築設計に徹底してアメリカン・テイストを持ち込んだことである。ホテル・ニューヨークはマイケル・グレーブスによるポストモダン、ニューポートベイクラブは、ロバート・スターインによるニューイングランド風、セコイア・ロッジは採用されたデザイナー中ただ一人のフランス人建築家によるフランクロイド・ライト風、ホテル・サンタフェは南西部砂漠都市のイメージ、ホテル・シャイアンは西部劇に出てくるセットのような街並みといった具合で、ここがフランスであるという感覚が全く得られないようにディテールに至るまで作り込んである。唯一フランス的な景観に見えるのは、当地お得意のバロック式整形庭園に多い十字形の平面をしたブエナビスタ湖と呼ばれる人造湖である。テーマパークとホテル地区の間のフェスティバル・ディズニーと呼ばれるモールは、フランク・ゲーリーが1950年代のアメリカの繁華街をイメージしてデザインしたものであり、赤と銀の縞模様の柱が超現実的に視界に割り込んでくる。いずれもこの地区の外側に広がる田園的な風景とは完全に異質な世界である。

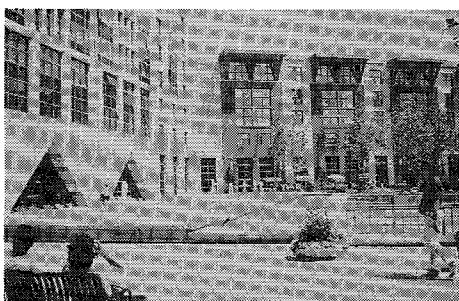
ポンピドーセンターやデファンス地区のグラン・アルシュなどで既に前衛建築に対して免疫ができるパリ人の目からは、キッシュな建築群に対してかなり手厳しい視線が送られている。パリ周辺にはヴェルサイユやヴォールヴィコント、シャンティイ、ソーラン公園といったバロック時代や帝政期の遺産が目白押しにちりばめられていて、悠然とした貴族的なリゾート空間を味わうことは高い入場料を払わなくてもいつでもできる上に、それらの歴史遺産をきちんと理解するには時間と教養が必要であり、ばかばかしい遊園地で消耗してい

る暇はないというのが彼らに共通している理由である。哲学が必修の高校教育を受けたフランス人らしい合理主義精神といつてよい。大学以上の高等教育を受けたフランス人にとって、まがいものに金錢を投じることは恥ずべき愚行なのだ。

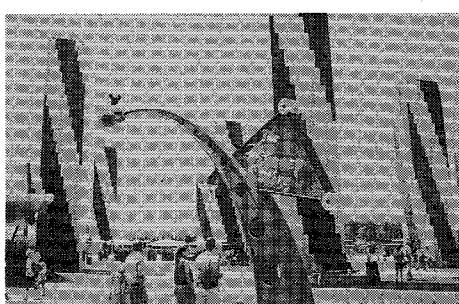
それにもかかわらずフランス政府が選択したものはアメリカ文化の投入という起爆剤だった。ECCの経済統合という時代の激流の中では、近隣諸国に新しい集客拠点を他国に先んじて起動させて雇用を増やし経済を浮揚させることが是非とも必要だったのである。ただ、ユーロリゾートを訪れている観光客にはアメリカ人が多く(恐らくNATO軍やアメリカ系現地企業の家族)、近隣のラテン系諸国からのグループがそれに続く。フランス人はほとんど見かけない。

こうした極端な異文化的景観の投入という事態は、日本では全く珍しくも何でもないことになってしまっているが、景観に関しては極めて保守的で厳しい景観規制を当然としているヨーロッパの人々にとっては、ヨーロッパの景観(Euro-scape)はどこへ行くのかという問い合わせを自覚させるに十分な事件と言ってよいものである。従って、中央政府が徹底的にコミットしたことに対しては厳しい批判が浴びせられている。既に、マルヌ・ラ・ヴァレをはじめとするパリ周辺の新都市開発地区では、住宅地開発に業務地開発を加えるという方針転換により景観に混乱が生じ始めており、国がそれに拍車をかけたことになるからだろう。

こうした賛否が渦巻く中、既にヨーロッパ中で各国の言葉に翻訳されたガイドブックが売られ、TGVのネットワークはフランスを越え、他国のナンバーを付けた車が駐車場を埋めている。経済のボーダーレス化は確実に景観を変容させているのである。



ホテル・ニューヨーク



フェスティバル・ディズニー

代表幹事会より

来年度各ブロック、委員会活動予算案の作成について

来年度（1993年6月～1994年5月）の各ブロック、委員会活動予算案を、今年の総会（7月）前に確定することになりました。各ブロック、委員会で前年度と同額の予算枠で検討の上、4月15日までに活動計画書と予算書を代表幹事会に提出して下さい。5月には、予算案の検討と予算原案の

内示を行う予定です。

また、5月末までは、各ブロック、委員会の今年度の決算書と活動報告書の提出をお願いします。

第3期総会を7月23日（金）午後1時より開催します。モニター・メッセ'93は同日総会後に開催します。

事務局より

中村 和泉

1 新会員の紹介

1992年12月1日～1993年1月31日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

1/31現在の会員数は358名です。

氏名	勤務先
小川 清一	（株）竹中工務店 名古屋支店
杉村 庄吉	（株）パブリックアート研究所
錦織英二郎	（株）社会空間研究所
山口 隆康	（株）アーバンデザインコンサルタント
川崎 芳孝	通商産業省 貿易局
千葉 桂司	住宅・都市整備公団 関西支社

3 事務局職員が松田安子さんから中村和泉に交替しました。今後よろしくお願いいたします。

2 住所変更等（敬称略）

氏名	変更内容
飯村 博	（株）アイシーエム企画 〒151 東京都渋谷区本町1-17-12 アサヒ初台ビル2F Tel03-3379-1188
土屋 邦男	東北地方建設局営繕部 〒980 仙台市青葉区二日町9-15 Tel022-225-2171 FAX同262-0217
藤江 秀一	自宅〒980 仙台市青葉区川内無 番地1-504 Tel022-262-3843 柳崎新アトリエ 〒106 東京都港区西麻布3-22-10
笠井 一八	（株）アーバンプランニングネットワーク Tel03- 5285-4399 FAX03-5285-4354
寺本 和雄	自宅〒690 島根県松江市外中原 町216-5 Tel0852-22-1413

名簿記載内容に変更のある方は事務局まで。

編集後記

- 第10号は、新しい試みを幾つか考えましたが、「論説」と「特集」だけがとりあえずスタートしました。「論説」はNEWSを主張の場としているという趣旨です。今回は広報出版委員の林さんが立候補されたのですが、投稿を期待しています。
- 「特集」は右記の企画意図のようなく市民まちづくりにおける都市環境デザインとし、各地の地域にねぎした活動を報告してもらいました。これまた、会員各位の自主的な報告をお待ちします。
- 都市環境デザイン「事例シート」を連載する用意をしております。次号以後をご期待下さい。
- ところで、第10号の発行が1カ月ほど遅れましたことをおわびします。1月末、そろそろ原稿依頼をと準備していましたところ、私どもの師・都市環境デザインの先達、水谷穎介さんが2月4日に死去しました。6日の福岡での葬儀、25日の神戸での偲ぶ会と直系の弟子である私が事務局長をつとめました。たまたま第10号の編集担当であり、2月末が発行予定であったことの不運をお察し下さい。
[小林郁雄]

特集の企画意図

- <市民まちづくりにおける都市環境デザイン>
●市民主体のまちづくり活動が全国的に展開されてきています。都市環境の整備主体は市民・住民にあるという意識が一般化してきたともいえます。しかし、それらのまちづくり環境改善への取り組みにおいて<都市環境デザイン>という視点が欠落しているかに思われます。
- より美しいまちづくりに向けたデザインへの関心が今後の市民まちづくりには不可欠であり、より広範な人々の運動へと展開していくためのカギになるのではないかと考えます。
- そこで、全国各地の地域にねぎしたまちづくり活動において<都市環境デザイン>という視点はどのような状況にあり、今後どのような展開が考えられるかについて、東京・世田谷区、芦屋市、徳島市、神戸市のまちづくり活動における私見を報告してもらいました。

JUDI NEWS

010

March 1993

広報・出版委員会

小林郁雄 林 泰義
沢木俊樹 宮前保子
土田 旭 森 延彦